

いよいよオリーブ山の坂にさしかかられたとき、弟子の群れは皆喜んで、自分の見たあらゆる御力のことで、声高らかに神を賛美し始めた。「主の名によって来られる王に / 祝福があるように。天には平和 / いと高き所には栄光があるように。」（ルカ19：37～38）

主イエスは、一団の先頭に立ってエルサレムに向かわれた。「オリーブ山」と呼ばれる山に面したベトファゲとベタニアに近づいた時、二人の弟子に、「向こうの村に行きなさい。そこに入ると、まだ誰も乗ったことのない子ろばのつないであるのが見つかる。それをほどいて、引いて来なさい。もし、誰かが『なぜほどくのか』と尋ねたら、『主がお入り用なのです』と言いなさい」と言い、使いに出された。行ってみると、言われた通りだったので、子ろばを主イエスの所に引いて来た。この村には、子ろばを求める主イエスに快く応じる人がいたということである。弟子たちは引いて来た子ろばの上に上着をかけ、主イエスをお乗せした。オリーブ山の坂にさしかかった時、主イエスがこれまでに現わされた力を見聞きした弟子たちの群れは皆喜び、声高らかに神を賛美する声を上げた。「主の名によって来られる王に / 祝福があるように。天には平和 / いと高き所には栄光があるように。」

主イエスは未使用の子ろばに乗ってエルサレムに入り、民衆から大歓喜して迎えられた。

当時、馬は全てローマ軍に徴用されていたので、馬に乗ることはできなかった。主イエスが子ろばを用意し、これに乗ったのは、ゼカリヤ書9章9節、「娘シオンよ、大いに喜べ。 / 娘エルサレムよ、喜び叫べ。 / あなたの王があなたのところに来る。 / 彼は正しき者であって、勝利を得る者。 / へりくだって、ろばに乗って来る / 雌ろばの子、子ろばに乗って」という預言の成就を現わすためであった。ゼカリヤは、今までに幾度となく、猛々しい軍馬にまたがり、威風堂々として入城する凱旋王を見て来た。しかし、凱旋王の顔が変わるだけで、正義と平和がもたらされることはなかった。ゼカリヤは、力を誇示する軍馬にまたがる凱旋王たちに絶望し、へりくだった姿の子ろばに乗った正しい王、新しい王が来ると、メシアの到来を預言した。主イエスは謙虚に仕え、命を差し出して、人を救うご自分の使命を、ゼカリヤの預言の成就として、子ろばに乗られる姿で現わしたのである。しかし、民衆は主イエスの真意を理解することなく、言葉と業によって現わされた主イエスの力はローマ支配から独立、解放をもたらしてくれると期待し、大歓喜して迎えたのである。主イエスの思いと民衆の願望には天と地ほどの違いがあった。主イエスの孤独はどこまでも深い。

ファリサイ派の人々は主イエスに大騒ぎする民衆を静めるように求めたが、「もしこの人たちが黙れば、石が叫ぶだろう」と言われ、騒ぎは押されないとされた。エルサレムに近づき、都が見えた時、主イエスは泣いて「もしこの日に、お前も平和への道をわきまえていたなら…。しかし、それは今、お前の目には隠されている。やがて時が来て、お前の敵が周りに柵を築き、お前を取り巻いて四方から攻め寄せ、お前とそこにいるお前の子らを地に叩きつけ、お前の中の石を残らず崩してしまうだろう。それは、お前が神の訪れの時を知らなかったからである」と言われた。この言葉は明らかに、ローマ軍によるエルサレム陥落を指している。著者ルカは主イエスの真実を理解せず、神の御心を受けとめず、不信と虚栄に酔い痴れたエルサレムは滅びると、事後預言（既に起こっていることを預言の形で語る）として著している。この日から、主イエスの神殿当局との闘いが始まる。